

アジア諸国における透析医療支援

長沼 俊秀*

皆さんは、行ったことのない国やプライベートではちょっとハードルが高く、まず行かないような国に行ってみたくはありませんか。具体的には東南アジア～一部の東アジア諸国ですが、そこに医療分野での仕事で行けたら、なんて素晴らしいことだとは思いませんか。心の中で思うことは多々ある方が多いと思いますが、実際には多分自分にはそういう機会はないであろう、行こうと思えばいつでもいける所だ、学会で欧米諸国へ行って最先端のことを学ぶほうが有意義ではないか、と考える人も多いと思います。私もそう考えていました。一方、時折、学会にて個人的にもしくは病院単位で海外で医療支援をしている医療関係者の方の発表を聞くたびに、うらやましいが、自分の身の回りや職場環境ではそんなことをしている人はいないし、そういう機会は巡ってこないだろうと思っておりました。

そんななかで、透析医学会の会期中に、発展途上国の透析医療の支援活動をされている NPO の医療関係者が身近にいたことがわかりました。その NPO のモットーは、「片手間で可能な範囲で支援を行う、ただし手弁当で」という良い意味でいい加減なものでしたが、逆にそれが気に入って 2014 年から入会しました。そこから、海外支援に行くチャンスが開けました。

現在までに、カンボジア、ラオス、モンゴル、ミャンマー、ベトナムでの医療支援や、2016 年からは日本透析医学会の発展途上国の透析スタッフ育成プログラム活動で、

* 大阪市立大学大学院医学研究科泌尿器病態学

大阪でのベトナム、カンボジア、ラオス、ネパール、インドネシアの若手医師研修の受け入れを経験しております。

これらの経験を通してとくに普通の臨床医が海外支援をするために大事だと思った点は、① 通常業務のなか、海外への医療支援に向かわせてくれる余裕と理解が職場環境にあるか、が最大のハードルである。② 医療法人での活動・方針として医療支援する以外は個人での活動が基本になるため医療支援を効率良くするためには何らかの支援組織に入ることが必要である〔たとえば、「NPO 法人いつでもどこでも血液浄化インターナショナル」、「日本血液浄化技術学会国際委員会」、「臨床工学国際推進財団」、「国際腎臓学会 (ISN)」〕。③ 渡航費用・滞在費用も重要で、支援組織がサポートできない場合は手弁当になる。④ 個人や法人へのプライベートな支援とならないために公的なカウンターパートの存在が大切で、通常、学会がその対象となるが、国によっては学会が存在しない場合がありその場合は腎臓学会設立の支援から始めなければならない。⑤ 手術をしに行く際は、インフラ、機材、物品の確保、そして英語でのコミュニケーションがネックになってくる、などがあります。

これらのポイントをクリアして初めて、通常の業務を行いつつ海外支援が行える状況になりますので、志のある方はトライしてみて下さい。自分の知見を広げる良い機会かもしれません。